

同志社と看護学教育

講演	岡山 寧子〔おかやま・やすこ〕
講師紹介	同志社女子大学看護学部長 同志社女子大学看護学部教授

同志社女子大学看護学部の岡山です。ご紹介にありましたように、私は看護学教育の道を行ってきた人間ですので、お話しできることは看護であり、看護学教育についてだと思っています。ですから、今日は皆さんに、ぜひ「看護の姿」を知っていただきたいと思っています。私は30年以上、看護に携わってきました。大学で看護学を学び、その後、病院で看護を実践してから、教員となりました。同志社女子大学に看護学部を設置するというで、昨年4月から現代社会学部に属しながら、その準備を進めてきました。今年4月、看護学部が開設され、あわただしい毎日をすごしています。

さて、本日は、まず看護について少し歴史的事をお話して、「看護」を知っていただきたいと思っています。そのなかでも日本における看護専門職の発展は明治時代中頃からのですが、実は、約130年前、同志社には、その創立者新島襄の指導のもと、この京都の地で医療と看護教育を開始した足跡があります。約130年前、同志社病院・京都看護婦学校を開設し、当時の日本において、キリスト教精神に基づいた、非常に先進的な医療や看護教育を実践したのです。残念なことに、その歴史はあまり長くはありませんが、今、その新島襄の医療人育成の志を引き継いで、女子大学で看護学部がスタートしたわけですから、ぜひその足跡や看護学部での学びについて、お話ししたいと思います。

看護という言葉

皆さんは、看護というと、どのようなことを思い浮かべますか。いろいろな場面で活動する看護師の姿でしょうか。多くの方は、病院で患者さんに注射をしたり、体を清拭したり、食事やトイレの世話している姿を思い描いているのではありませんか。では、「看護」という言葉をイメージしてみてください。どんなことをイメージされますか。看護の「看」の字は、「手」と「目」という字が組み合わさったものです。額に手を当てて発熱の状態をみて、顔のほてりやしんどさなどを目で確かめます。手と目で観察します。そして発熱があれば、冷たいタオルを額に置いたり、汗が出ていれば、それを拭いたりして、少しでも楽になるようにするのではないのでしょうか。そうなのです。看護という言葉は、「看(み)で護(まも)ること」なのです。皆さんは、見て護られた経験はありませんか。誰かに、すぐそばで見て護られている。おそらく、「しんどいか」と抱きしめられ、背中やお腹をさすってもらったことがあるのではないのでしょうか。そのような経験そのものが、看護を受けるということなのです。私は、人々の暮らしや生きざまのなかに看護があると考えています。看護について論じる時には、いつも「看護は、人類がこの世に誕生した時からあるもの」と言っています。たとえば、家族がちよっとしんどかったり、おなかがすいた様子を見せると、お母さんやお父さんが「おなかすいたの」「頭が痛いの」「どこかしんどいの」と、お腹や頭をさすったりしてやりとりしながら、熱があったら冷たいタオルを額に当てたり、おなかをさすいたら何かを与えてくれたりと、人と人のつながりのなかで看護があるのです。皆さんも、生まれてからずっと看護を受けながら育ってきたということだと思います。これが看護なのです(図1)。

もっと言うと、お母さんは皆さんを産み、育ててくださった。そのまわりにはいつもお父さんがいて、おばあさんがいて、おじいさんがいて、兄弟がいて、皆に囲まれながら人生を歩み、今の皆さんがある。そのものが看護なのだろうと思います。人と人のつながりのなかで、寄り添い、癒し合うというところに看護の起源があると考えています。

看護専門職の登場—ナイチンゲールの看護教育

私の出身校である聖路加看護大学(現、聖路加国際大学)のルカは聖書に出てくる医師だそうなんです。その他にも、医療、健康を守る、病んだ人を癒すことなど、聖書の中にたくさん場面が出てきます。誰がそれをなしてきたのでしょうか。そのような宗教の中で、看護は脈々と培われてきました。たとえば、中世の頃、尼僧の方たちがキリスト教の教えに基づいて、さまざまな体験をもとに医療や看護を実践し、それらの活動が僧院医学へと発展していったそうです。近・現代の医学は、エビデンスを重視した科学によって人体の病気を解明し、治療していくことが最も重要とされています。病気になれば治療すればいいという発想なのです。ところがそれ以前、僧院医学の時代は、人がどのように自然の中で生きていけるか、それによって適応して元気に生きていけるのか。病んだ時、どういう状態になったら、元気に戻れるのかという思想があったのです。どういふふう自然と適応しながら、元気に生きていけるかが重要だったわけなんです。実はもともと、人間には備わっている力があって、それを十分に発揮すれば病気を克服することができることといった「自然治癒」という発想がありました。養生すること、環境を整えることで病気が癒えてくる、元気を保つことができるという発想をするわけです。このことは、現代医療の中でも、とても重要なことだと言われているようにも思います。特に、現代の看護は、近・現代医学の発展に沿った方法論が主流となっていますが、人間自身もつ力をどうやって最大限に発揮し、元気に健康に暮らししていくか、環境とどう適応していくかがとても大事になっているように思います。

その後、宗教改革などで組織的な僧院医学は姿を消し、尼僧の方たちがいる看護が衰退してしまいます。一方、19世紀に入って世の中の近代化の進展と共に医学も急速に発展します。あわせて看護の近代化も進んでいきます。その先頭に立ったのが、イギリス人のF・ナイチンゲールです。彼女は、看護を専門的な職業として確立しました。先に述べたように、看護は人類の発展と共にあり、誰にでもできるものなのですが、それとは一線を画す看護専門職を登場させたのです。

私は看護専門職者です。皆さんと一線を画すというのは、私が専門的な看護学教育を受けて、国家資格として看護師の資格を有し、看護実践をしているということなんです。実は、これが看護専門職として成立させたナイチンゲールの功績なのです。ではなぜ、彼女は看護を専門職化できたのでしょうか。端的に言うと、それは三つのことを明確にしたことにあります。「看護とは何か」「看護の方法は何か」「専門的職業としての自立」です。これらを詳しく紹介したいところですが、それだけでお話が終わってしまいそうなので、ここでは言いませんが、興味のある方は、ぜひナイチンゲールの著『看護覚え書き』を一読してみてください。ひとこと言だけ、看護は「患者の生命力の消耗を最小限にすること」と述べています。これはとても深い言葉だと思います。

では、ナイチンゲールは、どのようにしてこれらを全世界に広げていったのでしょうか。彼女は、まず看護学校を設立し、そこで看護専門職者を育てたのです。イギリスのロンドンの国会議事堂のテムズ川をはさんだ向かい側に今もあるセント・トーマス病院に看護学校を開設しました。19世紀半ばの頃です。そこで教育を受けた看護師達が、世界に進出していくわけです。卒業生達が、ヨーロッパやアメリカをはじめ、アフリカ、オーストラリア、アジアの国々に行って、ナイチンゲールの看護教育・看護を実践したのです。19世紀後半には、看護の専門職化が全世界に広がっていきました。なかでも、北アメリカでは急速に発展します。病院の近代化が進むのとあわせて、看護を職業とする女性が急増しました。すでに日本でも明治はじめの頃には、『看護覚え書き』(当時は『看護の菜』)が紹介されています。そして、ナイチンゲールの教えに基づく看護学校が日本にも設立されます。日本で初めて近代看護教育を開始したのは、有志共立東京病院看護婦教育所(現、東京慈恵医科大学看護学科)です。次いで、1886年に京都看護婦学校での教育が始まります。なかでも、京都看護婦学校は、ナイチンゲールから直接指導を受けたL・リチャーズが教育にあたりましたので、彼女の看護教育思想をしっかりと受け継ぎ、伝えられたのではないかと考えています。心の中では、日本の近代看護の発展は京都からと思っています。

日本にナイチンゲールの看護が入って約150年となりました。その後、日本の看護教育は急速に発展していくのですが、今も日本の看護職はナイチンゲールの看護を大切にしています。現在も『看護覚え書き』は、看護学生の誰もが一度は手にするバイブルと言っても過言ではありません。特に最近、改めて『看護覚え書き』が多く読まれているように感じています。というのは、医療が進歩するなかで、何を看護の対象とするのか、もちろん病気ではなく「人」なのです。それを思う時、ナイチンゲールの看護思想は看護の原点となるわけですから。このように、看護歴史の中で、ナイチンゲールが看護を専門職として確立したこと、日本でも新島襄が設立した京都看護婦学校が、いち早くそれを導入したことを心にとどめてくださればと思います。

新島襄の医療への志—同志社病院・京都看護婦学校の開設

ここに1枚の写真があります(図2)。『京都看護婦学校五十年史』(佐伯理一郎著、1936年)に掲載されている京都看護婦学校の姿です。この学舎は、1887(明治20)年に完成、何度か増築した後の写真かと思われます。この学舎の1階は教室や実習室、自習室など、2階は学生寮だったと言われています。この学舎の左後方に同志社病院があったと思われます。また、この写真には、学校・病院の設立や運営に貢献した人々の写真がはめ込まれています。左から新島襄、J.C.ペリー、中村栄助、L・リチャーズです。J.C.ペリーはアメリカン・ボードの宣教師で、新島襄の医療への志を受けて、学校・病院の設立に尽力、病院長として活躍します。L・リチャーズはアメリカで最初に訓練を受けた看護師で、ナイチンゲールにも直接指導を受けた経験を持ち、看護婦学校の看護監督者として看護教育や看護実践に尽力します。いずれにしても、当時最新の医療・看護を提供し、特にナイチンゲールの看護を京都の地にいち早く導入したのです。病院と学校は、御所の西、蛤御門前にありました。今、その跡は全く残っていませんが、ただ一つ、佐伯米寿の記念碑が残っています。ぜひ同志社病院・看護婦学校跡の碑を建ててほしいものです。

残念なことに、新島襄が早く亡くなりましたので、同志社主導の病院・学校はそれほど長くは続きませんでした。新島没後は、医師・佐伯理一郎が管理者となりました。彼はクリスチャンで、新島襄の医療の志を引き継いでいった足跡があります。また、産科医でもあったので、産婆学校を併設しました。佐伯医師の息子たちも医師となり、学校の運営に携わりました。京都看護婦学校・京都産婆学校はいわゆる「佐伯の学校」と呼ばれるようになり、戦後の看護教育制度が新しくなるまで続けました。約60年間、看護教育を担ってきました(図3)。

ところで、新島襄は看護教育に対してどのような志をもっていたのでしょうか。同志社社史資料センターには、それが示されている新島自筆の書「京都看護婦学校設立の目的」が残されています。これは、看護教育を開始する少し前の、大日本私立衛生会京都支部での演説草案で、学校設立の意義について述べています。それによると、まず、学校設立に向けて「病人ノ心ヲ思フ真実ノ愛心ヲ以テ病人ノ為ニスル人カ入用デアリ」と述べています。そして、設立の目的を第一に「病人ノ苦痛ヲ救フ」、第二に「熟練ノ看護人ヲ養成スル」、第三に「病人ノ心ヲ慰ムル力甚大切」の三つを挙げ、病人の気持ちに沿って、苦痛を和らげる看護法を学ぶこと、また「看護婦ノ熟練シタルモノハ医者ノ薬法ヨリモ大切ナル事」と述べ、熟練した看護力と病人の心に寄り添える看護の重要性を示しました(新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1 同朋舎出版 1983年)。相手の気持ちに沿って、相手に寄り

添いながら看護することが大事ということ。「愛心」の言葉に込めたのですよ、と新島襄は言いたかったのではないだろうかと感じることができます。これは、現代の看護において一番大事なことです。私は、そういう新島襄の言葉に深い感銘を受けました。

そのような新島襄の志を、実際にはどのように実現していったのでしょうか。当時の京都看病婦学校規則や同志社病院規則が残されており、それを見ると具体的な看護教育や看護実践の様子が分かります。たとえば、看護学生はどういう立場だったか。1日の中で、1～2時間教室で基本的な勉強をして、あとはほとんど病院で働くといった働きながら勉強するシステムでした。2年間、病院で仕事をしながら学ぶということです。学生はベリーやリチャーズから教室で講義や演習を受け、その後病院に行くと、リチャーズたちの指導下で実際に患者さんに看護を実践しました。1年生の時には、ベッドメイキング、リネン交換、包帯の巻き方、体温、脈拍の測定など。2年生になるとくくなった方の処置、病人の方の食事とか、少し難しい看護を学びます。今と基本的には同じような内容で学んでいたことがうかがえます。そしてナイチンゲールの看護であることが分かります。今でいう災害看護も実践していました。たとえば、1891（明治24）年、美濃地震の際、その時、京都もだいぶ揺れたようで、京都看病婦学校の煙突が壊れたと言われているのですが、学生と医者が一団となって救援に駆けつけました。岐阜県大垣で家を借り、仮の治療室として、多くの被災者の治療に当たりました。当時の貴重な写真が残されているのですが、ベリーと学生達が一生懸命治療や看護をしている姿がありました。学生のユニフォームは、当時アメリカの病院で普通に用いられていた洋装でした。ブルーのギンガムのワンピースに胸当てのついた白いエプロンとキャップをかぶります。足元はなんと足袋に草履でした。草履は歩いても音がしないので、病床の患者さんにも耳障りでないと用いられたそうです。明治の頃の京都は、まだまだ着物の時代、洋装のユニフォームを着てさっそうと看護をする姿を想像してみてください。

さて、卒業生は約60年間で2000人近く出ているのではないかと考えています。目下、卒業生名簿や同窓会誌などを探り始めており、実際にはどれ位だったのかを明らかにしたいと考えています。少し見ているのですが、そこには日本だけでなく世界の看護の発展に貢献した卒業生達がたくさんいることが分かってきました。同窓会誌などから、京都看病婦学校初期頃の卒業生の動向を調べたことがあるのですが、卒業後、全国各地で看護活動をしていることが分かりました。多くは病院勤務なのですが、当時は戦争の時代、中国や韓国などのアジアだけではなく、なかにはフランスまで従軍し、看護活動をした人もいます。近代化が急速に進み、工場などで従事する人たちの健康を守る産業看護、社会福祉活動に貢献した人たちが、医療伝道のためにハワイなどに渡り、活躍した人たちなど、国際的に活躍した人たちもたくさんいます。

実は、去年、佐伯の学校の最後の頃の卒業生がご存命だということを知り、お会いすることができました。もう90歳を超えておられると思うのですが、とてもお元気で、びっくりしました。「私の人生は看護一筋でした。苦しいことも多かったけれども、とてもいい人生でした」とおっしゃいました。私はその気持ちはとてもすばらしいと感じました。私も30年、看護の仕事に携わってきましたが、まだまだそこまでは言うことができないと思います。その方に「あなたはこのから看護の人を育てるのでしょうか。ぜひがんばってくださいね」と言われ、同志社で看護職を育てること、学生一人ひとりかどうという人生を送るか、看護を自分の人生の中にとどのように取り込んで生きていくかをしっかり考えられるように教育していきたいと実感しました。

新島襄は医療への志をもち、同志社病院、京都看病婦学校を開設しました。そして、キリスト教精神のもと、当時としては、とても先進的な医療・看護が実践されていたことを、ぜひ覚えておいていただきたいと思います。私自身も今までは、看護歴史という視点からしか、京都看病婦学校や同志社病院を見つめてこなかったことに気づきました。同志社の歴史関係の書物を読み進めているなかで、新島襄の医療・看護に対する志を具現化するために、同志社はじめ多くの方々との並々ならぬ努力がなされてきた足跡を強く感じるようになってきました。

「病人ノ心ヲ思ヤリ真実ノ愛心ヲ以テ病人ノ為ニスル人」を育てていくということ。そのマインドを大切にしながら、新しくスタートした看護学部でどのような看護学教育を実践していけばよいのか、これが私に課せられた大きな宿題だと思っています。

看護学部開設—京都看病婦学校の志を引き継ぎ、さらに大きく

同志社女子大学では6番目の新しい学部として、この4月に看護学部が開設されました。京田辺キャンパスの北側に位置した「蒼蒼館」が看護学部関連棟です（図4）。ご覧のように同志社関連の建物としては、少々白いように思われるかもしれませんが、これは、京都看病婦学校の姿を少しでも残せるようにということで、このような姿になりました。1階は薬学部の研究室やOSCEルーム、2～4階は看護技術を学ぶ実習室やプラクティカル・サポート・センター、5階が先生方の研究室になっています。私の研究室は北向きなのですが、京都市内が一望でき、天気がいい日には京都タワーが見えるんですよ。

看護学部のカリキュラムポリシーは、新島襄の看護に対する志を引き継ぎ、女子大学の三つの教育理念を礎に、総合的なヒューマンケアに基づく看護実践能力を育成することです。1学年80名の学生が4年間学びます。教育課程は、必修として看護師国家試験の受験、10名の履修限定ですが、選択として保健師国家試験の受験ができる内容を含んでいます。国家試験は卒業前の2月に実施され、3月末に結果が出ます。看護師国家試験に受からないと看護師として就業できません。保健師の場合は、看護師・保健師両方の国家試験に合格しないといけません。また、保健師関連科目を履修していない者は、養護教諭1種の免許が取得できる科目を選択することができます。

ここの教育を進めていく上で大事にしたいことは、まず、新島襄の医療人育成への志を受け継ぎ、キリスト教主義に基づく、看（み）て護（まも）る看護の心、そして幅広い知識と人間力を育むことです。そして、「知る」「わかる」だけではなく「できる」看護力、すなわち看護実践能力をしっかりと育むことです。この実践能力とは、病院などに出て「すぐに看護ができる」ということだけを言っているわけではありません。新島襄が指摘している「この人が何を苦痛として抱えているのか」を判断する力がまず必要です。看護の対象となる方の心や体の状況をしっかりと把握し、この人に何が起きているかを、まず分かっていないと看護は進められません。観察やコミュニケーションを通して、それを探っていくわけです。これを看護では、ヘルス・アセスメントあるいはフィジカル・アセスメントと言います。この力をしっかり身につけなければなりません。その判断の上で、どのような看護が必要かを考えるわけです。たとえば、血圧測定を演習します。まず生理学的に血圧とは何かを学び、その測定方法や手順を確認し、実際に測定してみます。血圧計や聴診器の使い方、測定方法、実際に測定することを通して、だんだん血圧測定の意義も理解していき、なぜ血圧測定が必要なのか、測定結果から看護の対象となる方が今どのような状況になっているのかということが、だんだん分かってきます。このような積み重ねをしていながら、看護の実践能力を育成していくのです。血圧や脈拍測定、呼吸音や腸音の聴取などの観察項目、ベッドメイキングや清拭、歩行、排泄や食事の支援、コミュニケーションなど、非常に多くの看護技術があります。それらを対象となる方の思いや状況に沿って、正確に、安心・安全にそれらを実践していくことが求められています。これが、看護実践能力の大切なことです。看護の対象となる方が求めている看護をいかに実践していくかということ、なのかもしれません。また、これらを身につけるために、系統的で継続的な看護の専門的な授業は勿論のことですが、主体的に学ぶことが求められます。学生が自主的に学習できる環境をということで、看護学部では、プラクティカル・サポート・センターをつくりました。人間さながらのモデル人形を相手に、血圧や呼吸音、腸音の聴取の練習を行います。健康と病気の呼吸音を聞き分ける練習もできます。また、心電図の測定や救急時の心肺蘇生法、注射や採血などの技術も練習できます。すぐにパッとできるわけではありません。何回も練習していくうちに、そのコツが分かってきて、自然にできるようになります。モデル人形を相手にまず練習してから、実際に看護を提供していくプロセスを踏みながら、この技術はどのようなことに役立つのかしっかりと考えていきます。このようなことを、学生がいつでも自由に練習できるような環境づくりを心がけています。そのような学びを深めながら、1・2年生は1～2週間、そして3年生になるとほぼ半年間、本格的に病院や施設、訪問看護ステーションなど、多くの看護実践の場で実習をします。実際に患者さんを受けもって、看護を実践するので、その経験が、学生たちをぐっと成長させます。看護専門職者としてだけでなく人間として成長していくことを、長年の経験から実感しています。学生たちにキャリア教育の一環として、入学して間もない頃から、学生生活4年間をどのように過ごしていくのか、その後の人生をどのように考えていくのかということ、自分でしっかり展望できるように、あの手この手で進めています。私は看護職にはなりたくないわ、という学生もいるかもしれませんが。そんな学生も含めて、学生自身が自分の未来を思い描きながら、成長していく姿を見ていくことはとても楽しみなことです。できれば、同志社の看護学部で学ぶことができてよかった、と思っていただけのようにがんばらなければとも思います。

もし皆さんが、将来、病院等を受診されたり入院されたりした時に、「私は同志社出身です」という看護師が目の前に現れたら、どんな看護を実践するのかとく見ていただけたらと思います。できれば「自分の苦しさを分かってくれ、一生懸命それを和らげてくれようとしてくれる」看護師だったらうれしい限りです。これで、私のお話は終わります。ありがとうございました。

2015年6月4日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地「講演」記録

<HPでは写真等を省略しております。詳細は冊子体の『Doshisha Spirit Week講演集 2015』をご覧ください。>